

佳代はもともと身体が丈夫ではなかった。弥一郎は慌てた。妻を街道から少し離れた木陰に連れていき、横たえて周囲を見まわしたが、人家はおろか、水田すらどこにも見えない。弥一郎は、小川を探そうとその場を離れた。

「早く水を飲ませて額を冷やしてやらなければ……」

弥一郎は、いつしか小走りになり、気がついたときには全力で駆けていた。風に乗って潮の香が漂って来た。海が近くに感じられた。しかし、

〈作物ならば汁も出よう〉

向こうに番小屋らしい建物はあったが、断りを

言うために、わざわざそこまで行くだけの気持ちのゆとりがなかった。

弥一郎は、構わずに耕作地に足を踏み入れて、刀を鞘走らせると横に払った。手近の茎が真っ二つになった。切り口を見ると水気がある。唇を当てて舐めてみた。まだ熟れていない野菜のような青臭い渋みはあったものの、ほの甘さが口の中に広がった。

清水の流れはどこにも見えない。低い丘陵を回

ると、突然目の前に、背丈ほどもある見たことも

ない植物の林立が認められた。太い茎が空に向か

って真っ直ぐに立ち上がり、左右から細長い葉が

幾枚も出ている。辺り一面に植えられていること

から察すると、どうやら作物らしい。入り口に太い

杭が打ち込まれ、〃立入りを禁ず〃という木札が

掛かっている。

弥一郎の脳裏に、佳代の苦しそうな表情と干

からびた唇が大きく浮かんだ。

〈これなら、佳代の喉を潤すことができる〉

喜んで数本を切り取り、三尺ほどの長さにし

て、葉を削いで小脇に抱えた。そうして急いでも

と来た小道を引き返し始めた。途中まで走ったと

ころで、礫の飛んでくる音に身をかわした。振り

向くと、手に石や棒切れを持った百姓たちが数

人追いかけてきている。

「やい、この盗人が。おらたちが大事にしてい

る甘蔗を盗りやがって」

「そうだ。そうだ。おらたちの甘蔗だ。誰にも触

らせんぞ」

目を引きつらせたものすごい形相である。

弥一郎は早く妻のもとにゆきたかった。こうして
いる間にも苦しんでいるのだと思うと、すぐにも
その場を逃れたかった。

「許せ。あとでいかようにも謝る。この汁を
病人に飲ませたいのだ」

声の調子を怪しまれた。

「この侍、よそ者やぞ」

「他藩の間者かもしんねえ。病人だなんて嘘に

「この通りだ。決して怪しい者では……」

そこまで言ったとき、石くれが頭に当たった。
顔を上げると、もう一つ飛んできて額を打った。
手を触れると血がついた。

「おのれ、武士の面に傷をつけるとは」

弥一郎は、立ち上がりながら刀の柄に手をかけ
た。百姓がどよめいて後ろに退がった。弥一郎は
彼らを睨みつけたまま、一歩進んで鯉口を切った。
いままきに抜き放とうとして、思いとどまった。

へもとはと言えば非は自分にある。話せば分か

決まっとる」

弥一郎は必死で言い訳をした。

「違う。怪しい者ではない。妻が……」

断りもなしに人の物に手を出したという負い
目が、弥一郎にはある。刀を抜けば、力ずくで
百姓たちを退けることはできたが、そうしな
った。ここで刻を無駄にしている間にも、佳代の
身に異変が起こっているのではないだろうか、と
不安がつのるばかりである。弥一郎はひざまずい
て頭を下げた。

つてくれるはずだ」

柄から手を放し、力なく再び跪いて頭を下
げた。その振るまいが、一度は怯えた百姓たち
の狂気を爆発させるきっかけになったようである。
「信用できねえ。やつちまえ」

誰かが言ったかと思うと、石がばらばらと飛ん
できた。百姓たちが喚声を上げて近寄ってきた。
棒が容赦なく弥一郎の肩と言わず、背と言わず、
身体中に振り下ろされた。頭を上げ、手を前に
かざして制止しようとしたが、すぐに一撃を眉間

に受けて昏倒した。

どのくらい刻がたったのだろうか。弥一郎は自分の唸り声を聞きながら目を覚ました。日は、その輝きを弱めて大きく西の空に移動していた。湧き上がっていた入道雲が崩れ始めている。

弥一郎はよろめきながら、手にしたものを杖にして立ち上がった。それは、百姓が甘蔗と呼んでいたものだった。足もとを見ると、無残に折れたのが一本、土埃にまみれている。弥一郎は痛んだ身体をかばいながら腰を屈め、取り上げて埃を

「待っておれ。これを飲んだら元気になるぞ」

弥一郎は、手にした甘蔗の皮を歯でむしり取り、中の白い肉を噛んだ。渋みを帯びたほの甘い液が口中に溢れた。弥一郎は妻の唇に自分の唇を重ね、それを流し込んだ。そのあと、顔を放して妻の表情を見つめた。喉がかすかに動いた。そして、目が一度閉じたあとゆっくりと開いた。口もとに微笑みが浮かんでいる。

「……お…い…しい……」
声にならないほどの、か細い声だったが、弥一郎

払った。それから、杖を頼りに、足を引きずりながら佳代のもとに急いだ。

ようやくの思いで、妻の横たわっている木陰に近づいた。喉元から声を振り絞って、「佳代」と呼んだが返事がない。弥一郎は木陰に飛び込んだ。妻の傍らに膝まずき、顔色を見た。前よりも血の気がひいている。額は辺りの暑気を吸い取ったように燃えている。脈が消え入りそうに弱い。

弥一郎はもう一度妻の名を呼び、身体を揺すった。佳代が弱々しく薄目をあけた。

にはそれで十分である。

「待っておれ。いま、もう一度」
再び手にした甘蔗をかじり、液を口中に蓄えた。妻の口もとに覆い被さろうとしたとき、その顔色から急に生気が抜け落ちたような気がした。

「佳代……」

弥一郎は、不安に駆られてそつと声をかけた。口もとから、いましがた含んだ汁が半分流れ落ちた。佳代の表情は妙に静けさをたたえている。身体を小さく揺すってみた。反応がない。今度は大

大きく揺さぶった。微動だにしない。弥一郎は、狂つたように脇差を引き抜いて甘蔗の皮を剥ぎ、汁をすすって再び口移しで飲まそうとした。佳代の唇に力はなく、水気が口もとからこぼれ出た。首筋に手を当ててみると脈がない。何度も指先で首をまさぐったが、無駄だった。

弥一郎は妻の顔に頬をつけた。温かかった。

その温もりを、一生忘れることはないだろうと思つた。涙がとめどなく溢れてきて、嗚咽が漏れた。

やがて、悲しみが、腹の奥底から堰を切った濁流

弥一郎はつぶやいた。

「甘蔗か……」

手にした苗をつくづく眺めた。大きさや味は違

うけれども、やはり同じ物のようだ。弥一郎は妻を

想い、いまさらながらに百姓を憎んだ。そのう

ち、百姓が大事に育てていたという甘蔗さえも

憎くなった。押さえきれない感情に身を任せて、

苗を土間に叩きつけた。それからしばらくの間、

放心したようにその転がっていった方を見ていた

が、やがて身体を起こして土間に下り、拾い上げ

のように湧き上がってきて咆哮となり、周囲の野山にこだました。

真つ黒に天を覆った厚雲から、大粒の雨が降ってきた。雨は立ち木の枝葉の間を流れ落ち、

弥一郎と佳代の身体を容赦なく濡らし続けた。

雨風が戸口を叩く音に、弥一郎は我に返った。妻

を弔ったあと、居たたまれない気持ちになり、哀

しみの残る姫路を離れて、岡山城下にやって来たのだった。

〈あれから、はや八年がたつ〉

て、さも愛しそうに汚れを払った。

余人には理解しがたい振る舞いである。このと

き弥一郎は、妻が臨終前に残した口もとの微笑み

を思い出していた。彼の表情が苦痛に歪んでい

る。強風が狭い裏店の路地を拭き抜ける甲高い音

が聞こえた。わが身を長屋ごと吹き飛ばしてもら

いたい、と弥一郎は願った。

五

あの縄暖簾前の人斬り事件から半月ほどたった

この日は、朝のうちに激しい雨が降った。道はぬかるみ、田畑のあぜが緩んだ。師範代は所用があるとかで道場を休み、弥一郎が代稽古に呼ばれた。使いは、道場主のところで働いている作男が来た。

雨は午後になって小降りになったものの、稽古に出てきたのは、非番の足軽、百姓、それに町人など、数人に過ぎない。それも、足もとが明るいうちにと、打ち込み練習もそこそこに帰っていった。弥一郎は物足りない。あてがわれる給金は、

道場の門人には、気性が荒く、鼻つまみの若者も少なくない。次男、三男といった家の跡取りとは縁遠い彼らは、決して明るくない将来に対する不満のはけ口を、激しく身体を動かして自らを痛めつけることに求めていた。初めは、反抗的であつてかかる者もいたが、剣を握ると、容赦なく打ち据えられるものの、身分や齢に分け隔てなく熱心に指導する弥一郎に、好感を持ったようだった。

「先生、先生」

と、慕ってくるようになっていく。百姓な

稽古をつける人数や刻の長さとか関係がないのだから、儲けものと言えなくもないのだが、それではなにか、申し訳ない気がするのである。

三十半ばの骨格たくましい身体に、力がみなぎっているせいもあるだろう。このところの度重なる代稽古で、懐具合も少しは温かい。

〈空き腹を抱えたまま、当てもなく巷をさすらつていた以前の浪人暮らしには、どうしても戻りたくない〉
強く思っている。

どは、土と汗にまみれた顔を笑顔で崩し、畑で収穫したなすびや大根を持ってきてくれる。

(以上2月11日放送分)